

書評—ノーラ・エレン・グロース<佐野政信訳>

『みんなが手話で話した島』（築地書館）

この本は、「障害とは何か？」という私自身が長年テーマにして考え続けている問題を文化人類学的フィールドワークから根源的に考えさせる本です。

この本の帯にこの本の要約した解説があります。

ボストンの南に位置する マサーズ・ヴィンヤード島。
遺伝によって耳の不自由な人が数多く生み出されたこの島では、

聞こえる聞こえないに関わりなく、

誰もがごくふつうに手話を使って話していた。

耳の不自由な人も聞こえる人と全く同じように大人になり、結婚し、生計を立てた。

障害をもつ者ともたない者の共生

この理念を丹念なフィールドワークで今によみがえらせた、文化人類学者の報告。

さて、はしがきからのこの著者自身主旨説明を引用しておきます。

．．．．．ヴィンヤード島では三百年以上にわたり、健聴者が島の手話を覚え、実生活の場でそれを用いていた。島の健聴者の多くは、ちょうどメキシコとの国境沿いでくらす今日のアメリカの子供が英語とスペイン語を覚えてしまうのと同じように、英語と手話という二言語を完全に併用しながら大人になっていった。ろう者の社会的や職業生活を制限しているのは、聞こえないという障害ではなく、まわりの健聴者との間に立ちはだかる言葉の壁なのだ

．．．(中略)．．．．．

障害をもつ市民が社会にとけ込もうとしたとき、本当に社会の側では、そうした情況に適応したり、そうした情況から何かを引き出したりできるのだろうか。ヴィンヤード島の住民が三百年間にわたって経験したことは、この問いかけについて考える手がかりを与えてくれるはずである。それは私たちすべての将来とじかに関わる「自然の実験」だったのだから。

このオーラルヒストリーの主要部分を抜き書きしておきます。

私がおこなったすべての面接において、ろうの島民が一つの集団として、あるいは「ろう者」として思い浮かべられたり、取り上げられたりするケースが一度としてなかったという事実こそ、ろう者が社会のあらゆる面に完全にとけ込めたということの端的な証拠にほかならない。今日記憶されているろう者は、その一人ひとりに一己の人格が認められている。私が「ろう者」についてたずねたり、インフォーマント〔面接を受けて情報を提供する人〕に個人的に知っていたろう者を全員あげてもらったりしたとき、本当はもっとたくさん知っているというのに、二、三人しか思い出せない人が少なくなかった。特定の個人についてのコメントを引き出すためには、島に住んでいたとされるろう者全員のリストをそのインフォーマントに読み聞かせる必要があった。以下私のノートの中から、典型的

な例を一つひろってみることにしよう。今では九十代前半の老婦人に、面接をおこなったときのやりとりである。

「アイゼイアとデイヴィッドについて、何か共通することを覚えていますか」

「もちろん、覚えていますとも。二人とも腕っこきの漁師でした。本当に腕のいい漁師でした」

「ひょっとして、二人とも耳がきこえなかったのではありませんか」

「そうそう、いわれてみればその通りでした。お二人とも耳が遠かったのです。何ということでしょう。すっかり忘れてしまうなんて」

アメリカ本土では重度の聴覚障害は疑いようのないハンディキャップと見なされているが、ハンディキャップとはそもそも、それがあらわれる共同体によって規定されているものではないだろうか。私たちはヴィンヤード島のろう者を障害者の中に含めることができるが、こうしたろう者が社会的不利益（ハンディキャップ）を負された者という意味での障害者とは、どうしても思えないのである。このニューイングランドの共同体で、島のろう者はくらしのあらゆる面に自由にとけ込んだ。かれらは健聴の縁者や友人や隣人たちとまったく同じように大人になり、結婚し、家族を養い、生計を立てた。この点について、先述の女性よりさらに高齢の男性が次のように語っている。

「私は耳の悪い連中のことなど、ぜんぜん気にしていませんでした。言葉になまりのある人間のことを、いちいち気にしないのと同じです」

ヴィンヤード島において、一人ひとりのろう者がどのように遇されていたかをこのうえなく雄弁に物語っているのは、おそらく八十代の島の女性による、次のような言葉であろう。あなたが小さいころ、きこえないというハンディキャップを負わされていた人たちは、どんなふうでしたか、とたずねると、この女性は断固とした口調でこう答えた。

「あの人たちにハンディキャップなんてなかったですよ。ただ耳がきこえないというだけでした」

冒頭にも書きましたが、私が長年追いつけているテーマは、障害とは何か、差別の根拠として現れる「差異」とは何かということですが、この本は、聴覚障害者問題について、このテーマに迫っています。

障害者問題に色々論及した本でも、障害があるということを自明の事実として、とらえることが常でした。そういう中で、違いがあるのだから、その違いに応じた処遇をしないことは悪平等だし、逆差別だという論理がまかり通ってきました。そのことに反発する運動も倫理主義的に差別を押しえ込もうとして、差別を陰化させるか、失敗を繰り返していました。倫理主義は利害の前で、常に泡となって消え去り、時には「テロリズムへの通路」にもなるものでしかありません。そもそも「違い」があるということはどういうことなのか、それは超歴史的超社会的—普遍的なことなのか？という問いかけがなされて来なかったか希薄だったのです。

このフィールドワークは、「聞こえないこと」が異化しない場合があること、反転する場合があることを示しています。「聴覚障害」ということが、関係性の問題であることを指し示しています。

我々、吃音者については、「アメリカ先住民のある部族において、「吃音」－「どもり」という言葉に相当する言葉がない。」ということから吃音が、異化しない可能性ということが語られていたことがあります。このフィールドワークについては、私は原典に当たられていず、その作業を引き伸ばし続けていますし、そのことを運動論として、吃音者の運動の中に生かせる論形成まで進め得ていないのが吃音者運動の現状ですが、別の視角からする<障害>が異化しない可能性として、また、異化するにしても異化の仕方が違う、負の価値判断のはっきりと下された異化ではない、という問題として指摘しようと思います。

逆に言えば、いかなる場合に、「障害」として異化するのか、ということを考える中で、この本の前書きにもあるように、将来の可能性として、障害が異化しない社会を作りうる可能性と、その条件を考えることができるのではと思います。

この本では直接的には聴覚障害者問題にしぼられてしまっています。精神薄弱者や他の「障害」が異化している事実も示されていますし、そのことについてのコメントもありません。しかし、聴障者の問題から押し広げて、障害者の問題が関係性の問題としてとらえられ、その関係性自体をとらえる中において、障害者問題＝障害者差別の問題を解決する可能性ということを示し得るのではと思います。

本書の裏ページにも同じ主旨の簡単なコメントが寄せられています。

差別はいつでもどこでも存在していた……

この仮説の正当性に疑問をさしはさむ。(『クオリティヴ・ソシオロジー』)